

銀杏

発行所

〒792-0835

新居浜市山根町8番1号

曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行人 村上 徳 存

電話(0897)41-6563

FAX(0897)40-3127

毎月1日発行

(振替 01330-2-31918)

瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

通元老師を偲んで【三】

大本山永平寺副監院
栃木県明林寺住職

西 田 正 法

『銀杏』読者の皆様、お久しぶりです。『銀杏』四月号がお手元に届いて以来ひと月となります。「通元老師を偲んで」【第三回】となりますが、前回は病院で迎えた最初の晩、役得で朝六時までの安眠が約束されて眠りに就いたところまでお話ししました。思い出して頂けたでしょうか？では、続けます。

すっかり寝込んでいた私の脇腹が、何者かに突っつかれたのです。(ツンツンツン)と。ビックリして目を覚ますと、老師が細い竹の棒で私の脇腹を突つつきながら、「おい、起きよ！おい、起きよ！」と。私を睨んでおられたのです。

からぶら下げ、片手だけの法界定印。片足はギブスで一本棒のように伸ばし、もう片足をギブスの腿の上に乗せて、妙な格好ではありますが大真面目に坐禅をしておられたのです。私もベッドに上がり坐禅に入りました。「坐蒲を取りに行かせたのは、草刈りに出す口実ではなく、最初から病室で坐禅をさせるおつもりだったのです。六時まで起きてはいけない規則なのに……」心の中で呟きながらも老師とマンツーマンの気の抜けない緊張した坐禅が小一時間続き、五時を僅かに過ぎた頃、老師が「おい」と言つて顎をしゃくられた先に絡子が有ったので、その絡子を老師の頭の上に載せ、私も自分の絡子を頭の上に載せると、「やれ」と仰るので「大哉解脱服、無相福田衣、披奉如来教、廣度諸衆生」と、小さな声で「搭袈裟偈」を唱えました。未だ、起床が許されている六時には四、五十分ある五時過ぎです。同部屋の皆さんは就寝中なのです。しかし、「搭袈裟偈」をお唱えしたということは、其

の儘の流れから推測すると、次は朝のお勤めとなります。まさかとは思いましたが悪い予感はあるもので、「皆さんまだお休みじゃんけんのお、大きな声は出さんでえエぞ。大略朝課でえエからのう、やれ」と仰る。またもや仕方なしに、小声で「摩訶般若波羅蜜多心経オーオッオー」と挙経すると、「おい！読経の前に先ず三拜じやろうが！」と叱られ、ベッドの上で礼拝しようとして、「そんな高いところで礼拝する奴があるか！下に降りて礼拝せえ！」と窘められ、下に降りて礼拝し、ベッドに上がって正座をし、改めて「摩訶般若波羅蜜多心経オーオッオー」と挙経して朝のお勤めが始まりました。般若心経に続いて大悲心陀羅尼です。「大悲心陀羅尼イーイッイー」「ナムカラタンノートラヤーヤーナムオリヤーポリョキーチャーシフラーヤー」と、カーテンで仕切られた一画で私と老師が小さな声でボソボソボソお経を読んでいるんです。

老師は僧侶であつても大怪我をされて救急車で病院に担ぎ込まれておられますからご存知ないのですが、病院と僧侶は相性が悪いのです。私は瑞應寺の規則通りに、下駄履きに裾上げた衣姿で病院に着いたのです。受付で「檜崎通元の看病に來た者ですが、病室を教えて頂けますか？」と声を掛けると、返ってきた言葉が「あなた、他に着るもの持つて無いの？ここを何処だと思つて居るの？病院ですよ！非常識じゃないですか！？」でした。衣姿で病院に來たことを先ず咎められたのです。そして、その格好で老師の病室へ向い廊下を歩いていると、点滴をしながら元氣無く点滴液が入った薬瓶がぶら下がるキャスター着きのポールにつかまって歩いていた老人が、私が下駄の音を殺してカツ、カツと歩く音に反応して私の姿を見た途端、一メートル程大きく飛び退き私を睨むのです。その眼は「坊主が來たつて俺は未だ死ななからな」と、訴えているようでした。給湯室に洗い物に行くと、皆さん蜘蛛の子を散らしたよ

うに立ち去って仕舞うのです。まるで死に神扱い、坊さんお葬式、これが一般の方のイメージですから、病人や怪我人が集まる病院で歓迎される筈がありません。そのような状況の病院で、起床時間前に読経をしているんですよ。

同室には、佐野さんや木村さん、三浦さんも居られました。もうお一人居られましたがお名前を忘れました。この方々が、「この度老師の身の回りの世話を努めさせて頂くことになりました大慈と言います。宜しくお願い致します」と、ご挨拶申しあげると、「私は佐野です。これには胃潰瘍と書いてありますがどうせ嘘です。本当は胃癌なのは分かっているんです。長くないんです。」と、嘘か実かベッドに下がっている名札に書かれた病名とは違うことを言うのです。佐野さんばかりではなく、多かれ少なかれ差こそありますが皆さんご自身の病状を過大に申告するのです。今から約四十年前ですから、癌を本人に告知することは無

かった時代です。多分、真実が分からず疑心暗鬼になって不安だったんでしょうね。そのような方がお休みになっている病室での、「ナムカラタンノートラヤーヤーナムオリヤー……」ですよ。皆さん寝ておられる、スヤスヤと。その耳に何処からともなく「ナムカラタンノートラヤーヤー……」お経の音がジワジワジワ入っていくわけですね。これは叱られて当然でしょう？「いい加減にしてくれ!!」と、絶対叱られると思いました。だってそうでしょ!?皆さんの枕もとでお経を読んでいるわけですから、文字通り「枕経」ですよ。絶対叱られると思ったのですが、さに非ず。一日目、二日目、三日目の朝も何事も無く読経無事終了です。私は、「皆さん熟睡しておられるんだな」と思い、内心ホッとしました。しかし、三日目の朝食後それは意外な形で起きました。看護師さんがいつものように注射器が沢山載ったワゴンを押してやって来しました。当時は硝子製の注射器でした

から、硝子と硝子がぶつかり合う独特な音を立てながら近付いてくるのです。老師は注射をお好みではありませんでしたので、その音がすると機嫌悪くなるのです。

いつもの看護師さんがワゴンを押して病室に入ってきたのですが、何やら様子が違います。いつもなら、「皆さん、お注射ですよ」と入ってきたのですが、無言です。更に、いつも入り口に近い方から、「はい、佐野さんお注射しましょうね」「三浦さん、お注射ですよ」と、声を掛けながら注射を済ませ、一番奥窓際の老師は最後なのです。ところがこの朝は、最初からターゲットを老師お一人に定めているかのように、他の人には脇目も呉れず老師のベッドまで一気に進み、「檜崎さんお注射ですよ!」と、やや乱暴に寝間着の袖をめくり、ゴム紐をグリグリつと腕に巻くと、普段は小・中・大の順番で打つところを、やおら一番大きく黄色い液体が入った注射器を取り、老師の腕に立てたのです。そして、針が刺さるか

刺さらないか、皮膚が注射針に押されて凹み、あと一息で針が刺さる一步手前で停めたのです。そうしておいて、老師に厳しい目を向けるや、「あーそうそう、和尚さん達、朝妙なことをしているそうですね。病院の規則はご存じですね。明日からは止めて頂きますね!」と、注射器を立てているんです。これは痛快でした。「この看護師さんは凄い!」と感心させられたものです。毎日注射を打ちながら老師の注射嫌いを見抜き、規則破りをする老師にお灸を据え、窘めたのです。私はそれが可笑しくて思わずブツと吹き出してしまいました。老師はというと、看護師さんの注射器を立てての「止めて頂けますね!」の言葉にギョッとされたお顔をされたのですが、その老師の目とブツと吹き出した私の目とが合ってしまったのです。「まずいところを見られた」と思いましたが、後の祭りです。この騒動に、入口一番近くのベッドの佐野さんが、慌てた様子で「看護師さんそうじゃないんじや。

和尚さんを叱らんでやってくれ!」と言ったのです。「僕は二十歳で結核を患ってから体が弱くて大洲市内の病院で入院設備が整っていて、僕が入院したことのない病院は一軒も無い。それほど入院を繰り返して来た僕じゃが、まさか朝お経さんを聞くことのできる、お勤めに参加させてもらえる入院生活はこれが初めてじゃ。有り難いことだと思っただし、お経という事もあつて、中には嫌がる人もあるだろうから、同室の人たちには和尚さんがお経を読んでいるという事を言うことが出来ない、勿体無いことだと思ひながら歩いていたら、看護師さん、あんたが正面からやって来た、そこで、僕らの部屋じゃ和尚さんが朝早くからお経を唱えとる、と言ったまでで決して苦情を言ったつもりじゃない、だから和尚さんを叱らうのです。すると、他の方が「あー、佐野さんアンタも知ったんか?。僕も知つてましたよ」「僕も最初の朝は、

そりやビックリしましたが、和尚さんたちが朝のお勤めをしていると分かったら、寝ながら手を合わせたんじゃが、どうもまずい格好に思えて、こりゃいかなと起き上がってベッドの上に正座して、手を合わせ直して朝のお勤めを聞いておりました」と木村さん。その後、他のお二人も同じように仰り、結局全員が起きてベッドの上で合掌してお勤めに参加して居られたことが判明しました。

この状況に佐野さんが、「ところで和尚さん、お経さんというものは、黙って聞いているのと、一緒に読むのとどちらが功德がありましような？」と老師に問うのです。この間、看護師さんは中途半端に老師の腕に注射器を立てた儘です。老師も注射器のことは忘れて「そりやアあんた身口意の三業と言いましてな、黙って聞いているより自分の口できちんと唱えた方が、功德はありますわい」とお答えになる。それに対して佐野さんが、「ほいじゃア、折角皆起きとるんじやから、

和尚さんをお願いして明日の朝から一緒にお経さん唱えさせ貰ったらどうでしょうなア？」「そりやあえエですなア。是非、お願いしましう。」「ほうですか。それじゃあ明日の朝から一緒にお勤め致しましう」と老師が受け、話が決まって仕舞ったのです。

看護師さんは相変わらず注射器立てたまま、「規則だから駄目です」とも言わず、所作なさそうに皆さんの様子を見ていましたので、老師に笑った顔を見られていた私は、此処ぞとばかりに意を決して看護師さんに尋ねました。「その注射器ですが、その黄色い液体は何の薬ですか？」と。すると看護師さんは「アアこれですか、ビタミン剤です」と。そこで私は更に尋ねました。「そのビタミン剤は老師に無くてはならないものですか？」と。看護師さんは「まア、転ばぬ先の杖みたいなものです」と仰る。そこで私は、「お気付きだと思いますが、老師は注射をお好みではありません。その一番太

くて長いだけでも止めて頂けませんか？」と、駄目で元々とはばかりに懇願したので。言ってみるものです。看護師さんも立てたままの注射器に困っていたのか、あっさり大きな注射は止めて、小と中だけを打って行きました。

この日もお寺の草刈りに行く時間になると、老師が「おいおい、今日草刈りに行ったら、本堂の須弥壇の裏に『在家勤行聖典』というお経本があるからのウ、ほやなア、十冊、いや二十冊、いや三十冊も持って来てくれ」と仰るのです。「承知しました」とは返事をしましたが、私達の病室は六人部屋で、私達の他は四人しか居ません。なのに、三十冊とはどういうことか皆目見当も付きませんでした。その日の草刈りを済ませ、お風呂を使わせて頂き、帰りには『在家勤行聖典』三十冊を風呂敷に包んで持ち帰りました。

(第三回終わり、次号六月号へと続く)

令和四年十月三十一日

大慈通元大和尚 通夜説教より

禪のたより

テレホン法話 〇八九七 四一・〇〇三三



◆ 天にも地にも われひとり

四月に入り、見頃となった桜が瑞應寺を彩っています。

また、春は始まりの季節です。入学や就職など、新たな生活が始まり、期待に胸をふくらませている方もおられるでしょう。

実は仏教においても、四月は大きな始まりを意味しています。四月八日はお釈迦さまが生まれになった日です。降誕会、花祭りとも言われるこの日、各地のお寺には、花御堂という小さなお堂が置かれ、屋根を草花で飾ります。そのお堂の中には、生まれたばかりのお姿をした、お釈迦様をお祀りします。そして、お釈迦さまのご誕生を甘露の雨を降らせて天が祝福した、というお話になります。

い、お堂の中のお釈迦様に甘茶を注いで手を合わせ、ご誕生をお祝します。

さて、お釈迦様の誕生からおよそ二千年前が経ち、お釈迦様の時代と比べて、人々の生活が大きく変わってきたのは間違いないでしょう。現代の私たちの生活は、物にあふれ、食べ

物や生活に必要なものが簡単に手に入るようになりました。お金さえあれば自分一人で生きていける、と思うこともあるかもしれません。しかし、食べ物一つをとっても、自分に見えていないだけであつて、誰かがその食べ物の材料を育て、誰かが調理し、誰かが届けてくれているからこそ成り立つもの。第一、その食べ物自体が植物なり、動物なりの命からできているのです。食べ物に限らず、今私たちが生きているということは、今まで私たちを支えてきた命があったということ。そして、これからも人に限らず、すべての命、いうならば大自然の命のつながりによつて支えられ、生かされていくということなのです。

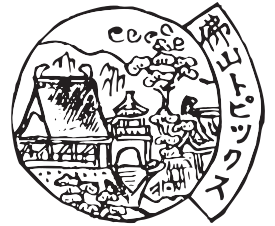
お釈迦様はお生まれになったとき、『天上天下唯我独尊』とおっしゃったと言われていました。耳にした方もおられるでしょう。しかし残念なことに、この言葉の意味を、「この世で私一人だけが尊いのだ」といった、うぬぼれのような、間違った意味で捉えられることが多く、そう思ってきた方もおられるかと思えます。しかし、実際は違います。「我」は、お釈迦様一人だけを指すのではなく、この世にあるすべての命、一つ一

つにとつての、それぞれの“我”、自分自身を示しています。天にも地にも我一人。つまり、この世にあるすべての命、それぞれが尊く、たった一つしかない大切な命であるのだと。そして、それぞれが皆、大切な命なのだから、お互いに大切にしたい、いきましよう、ということをお願いしたのです。先ほどの食べ物の中、見えないところで自分の命を支えてくれる人々がいて、その一人一人が同じように大切な命を持っている。そして、その命をさらに支える命があるのです。

春は始まりの季節です。人に限らず、多くの草花が芽吹き、眠っていた生き物たちも活動し始めます。ですからこの花祭りの時期は、普段はなかなか気づかない、さまざまな命を、目で見て感じることができるとは、いいでしょう。

あらゆる命との関わり方を、“天上天下唯我独尊”という言葉を通じて私たちに教えてくださった、お釈迦さまに感謝し、ご生誕をお祝いしましょう。そして、生かされている自分自身にも感謝し、あらゆる命の尊さに思いを巡らせる日にしたいものです。

瑞應寺専門僧堂知殿 三宅 俊尚
令和五年四月一日〜十日



■ 釈尊降誕会

四月八日（土）、暁天坐禅、略朝課に引き続き釈尊降誕会を厳修。吉松維那導師のもと、出班焼香、香湯を以て誕生仏灌浴。釈尊降誕の聖日を祝った。
当日法堂にて、ひかり幼稚園入園式、進級式が行われ、花御堂の誕生仏に甘茶をかけ、親子ともに花祭りをお祝いした。



四月の日鑑

一日	祝禱
四日	参玄会（六日迄）
八日	釈尊降誕会
十五日	祝禱・略布薩
十八日	観音講・勉強会
廿八日	前夜祭
廿九日	春季金毘羅大祭
卅日	略布薩

五月の予定

一日	祝禱
七日	日曜参禅会
九日	参玄会（十一日迄）
十三日	楞嚴会啓建・衆寮諷經
十四日	配役行茶・入寺式
十五日	土地堂念誦・庫司点湯
十八日	祝禱・小参・人事行札
廿一日	略布薩
廿八日	観音講・勉強会
卅一日	略布薩

永平寺贈西堂 大慈通元大和尚小祥忌法要
当山三十世重中興

令和五年七月二日（日）

大夜諷經 十九時より

令和五年七月三日（月）

正當諷經 十四時より

銀杏感謝録

愛媛県	丹勝登美 殿
愛媛県	角田和三 殿
兵庫県	佛名寺 殿
愛媛県	網干一義 殿
愛媛県	品川博子 殿
愛媛県	小野邦子 殿
長野県	村上泰助 殿
東京都	常林寺 殿
愛媛県	道舊寺 殿
高知県	永禪寺 殿
静岡県	明香寺 殿
広島県	西金寺 殿
兵庫県	圓通寺 殿
京都府	谷口法衣佛具店殿
広島県	西福寺 殿
愛媛県	村尾勉久 殿
愛媛県	越智俊之 殿
愛媛県	土岐敏勝 殿
愛媛県	神野征子 殿

（令和五年一月十八日受付迄）



鐘 声

安居を始めて約半年、新たに上山された方を迎え、古参と呼ばれる様になってしまいました。

まだまだ未熟のままですが、古参和尚様や役寮様からの指導を受けながら修行に励んでおります。

正法眼蔵仏教のお示しを読みました。

「修行の彼岸へいたるべしとおもうことなかれ、彼岸に修行があるがゆえに修行すれば彼岸到なり」

これからも怠たることなく努めていかなければいけないと思います。

鐘司 康稔